

第三十六小洞天「金華山洞」の現況

酒井規史

一、はじめに

筆者は2014年9月7日に第三十六小洞天的金華山洞を調査する機会を得たので、その現況を報告したい。以下、洞天の概要を記したあと、各種資料と対照させながら洞天および周辺の遺跡の現況を述べていく。

二、金華山洞の概要

(一) 金華山洞

金華山洞は浙江省の金華市にあり、市街地の北側およそ15キロの金華山に位置している。「金華山」は特定の山だけでなくその一帯も指しており、以下に述べるようにその領域はかなり広い。金華山がいつごろから宗教的な聖地となったかは分からないが、葛洪の『神仙伝』には金華山を舞台にした皇初平（黄初平）のエピソードがあり、東晋時代には神仙の伝説の舞台として認知されていたようである（詳しくは後述。）

梁代の劉孝標は、金華山に隠居した際の記録として「東陽金華山栖志」を残している¹。文中には、左慈が金華山について「洪水五兵を免れるべく、神丹九転を合すべし」と称したとある²。この出典は不明であるが、災厄から逃れることができ、丹薬の作成に向いている場所、つまりは神仙修行に適した洞天として認知されていたようである。また、同じ「東陽金華山栖志」には、招提寺という仏寺や道館が存在していたという。遅くとも梁代には、金華山が宗教活動の場所としても機能し始めていたことが分かる。

その後、金華山は明確に洞天として位置付けられ、唐代の司馬承禎は、金華山洞を第三十六小洞天としている。司馬承禎の『天地宮府図』（『雲笈七籤』巻二十七、『道蔵』所収）には、以下のようにある。

第三十六金華山洞。周迴五十里、名曰金華洞元天。在婺州金華縣、屬戴真人治之。(9a)

ここには所在地が婺州の金華縣であること、戴真人の治所であること以外に特に情報はない。続く唐末・杜光庭の『洞天福地嶽瀆名山記』（『道蔵』所収）では、

注1…魏斌・富田絵美訳「六朝名山の生活世界—『東陽金華山栖志』を手掛かりとして—」（中国社会科学院歴史研究所・財団法人東方学会・渡邊義浩編『第二回日中学者中国古代史論壇論文集 魏晋南北朝における貴族制の形成と三教・文学』所収。汲古書院、2011年）を参照。中国語版「六朝名山的宗教生活——以《東陽金華山栖志》為線索」は余欣主編・復旦大学歴史学系編『中古時代的礼儀、宗教与制度』に収録（上海古籍出版社、2012年。）

注2…原文「左元放稱此山云、可免洪水五兵、可合神丹九轉」（大正蔵52、276頁中）

金華山洞は小洞天の三十五番目に挙げられており、『天地宮府図』と順番が異なっている。洞天については、

金華山金華洞元洞天。五十里。在婺州金華縣。有皇初平・赤松觀。(8b)

とあり、「金華洞元洞天」という別称と、「皇初平」「赤松觀」という重要なキーワードが付け加えられている。赤松觀は金華一帯の道教の中心となった道觀である。

北宋・李思聰の『洞淵集』（『道蔵』所収）になると、少し記述が詳しくなる。

第三十六金華山。高一千丈、洞周迴五百里。名金華洞元之天。即黃初平真人遇赤松子、叱石爲羊、得道處。在婺州金華縣。上應婺女星、故曰金華山。(卷二・8a～b)

この文献では皇初平は「黃初平」と称されており、簡単にエピソードにもふられている（以下に詳述）。洞天の順番は三十六番目に戻されており、以降の資料では三十六（小）洞天として定着していく。

この洞天については、『金華赤松山志』（『道蔵』所収。以下、『赤松山志』と略称する）に南宋時代までの資料が集められている。本書は「丹類」「洞穴類」「山類」「水類」「宮宇類」「人物類」「制誥類」「碑籍類」という項目を立てて各種の資料を整理しており、本稿の作成の際にも多く参照している。

作者の倪守約についての詳しい資料は残っていないが、赤松宮で活動していた道士のようである³。宋末元初の方鳳が「金華洞天行紀」⁴の中で言及しており、元初まで活躍していたことが分かる。この「金華洞天行紀」は、方鳳が至元二十六年（1289）に金華山洞を訪れた際に記したもので、当時の状況を知る上で参考になる。

(二) 皇初平（黃初平）

金華山洞に関連する仙人としては、上述のように皇初平（黃初平）が最も重要である。この仙人の姓は資料によって「皇」の場合と「黃」の場合が両方とも存在しており、もともとどちらであったかは定かではない。なお、香港で非常に人気のある黃大仙はこの皇初平（黃初平）のことであり、現在では「黃」姓の方でよく知られている。なお、『赤松山志』と「金華洞天行紀」では「皇」姓とされているので、本稿では皇初平（黃初平）と記すことにする⁵。

以下、簡単に皇初平（黃初平）のエピソードを紹介する。各種の伝記資料があるが、葛洪の『神仙伝』がもとになっているので、『神仙伝』のものを記す⁶。

注3…『赤松山志』の序文には、「遂捨家辭父母、來投師資、粵自承恩、備冠裳、未數積今四十餘年」とある(1a)。

注4…方鳳『存雅堂遺稿』所収。この文献の書誌については、顧宏義・李文整理標校『金元日記叢編』（上海書店出版社、2013年）を参照。本稿では『四庫全書』本を用いる。

注5…皇初平（黃初平）および黃大仙信仰については、黃兆漢「黃大仙信仰考略」（同『中国神仙研究』所収。台湾学生書局、2001年）を参照。初出時のタイトルは「黃大仙考」（『中国文化研究所學報』卷十六、1985年。）

注6…『神仙伝』の訳は、沢田瑞穂訳『列仙伝・神仙伝』（平凡社ライブラリー、1993年）を参照した。なお、本稿では李昉など編『太平広記』（中華書局、1961年）所収のテキストを用いる。

(1) 皇初平(黄初平)は羊飼いをしていた。十五歳の時、道士に見込まれて「金華山の石室」に連れていかれる。その後、四十年あまり実家のことを忘れていた。

(2) 兄の初起が弟を探しているうち、市中で道士に出会う。弟のことを告げると、道士は「金華山に皇初平(黄初平)という牧童がおり、それが弟に間違いない」と答える。道士と共に金華山に行き、兄弟は再会する。

(3) 初起が初平に「飼っていた羊はどこにいるのか」とたずねると、初平は山の東側にいると答える。初起が見に行っても白い石があるばかり。初平に羊がいなかったことを告げると、やはり羊はいると答える。そして、兄弟で一緒に白い石のところに行き、初平が羊に「立て」と言うと、白い石がみな羊に変わった。

(4) 初平は初起に仙道を学べばこのようなことができると告げる。初起は妻子を棄てて、初平について修行を始める。松脂や茯苓を服用し、五百歳に至った。故郷に戻ったものの、親族はみな亡くなっていたので山に戻った。

(5) 初平は赤松子、初起は魯班と改名した。彼らの薬を飲んで仙人になったものが数十人いるという。

この皇初平(黄初平)の伝説により、金華山洞は聖地として有名になったと思われる。この仙伝は唐代の主な類書に引用されていることから、かなり普及していたものと思われる。特に(3)の場面に見える、白い石が羊に戻るエピソードは皇初平(黄初平)の代名詞といえよう。

後代の皇初平(黄初平)の伝記には少し変化がみられる。『赤松山志』の冒頭にある「二皇君」は南宋時代におけるバージョンであり、以下に述べる道観などとも関係があるので、大きな違いがある点を述べておく。

第一に、兄の初起は晋の太寧三年、弟の皇初平(黄初平)は咸和三年に生まれたという設定が新たに加わっている。『神仙伝』のエピソードには年代が無く、特にいつの時代とは明示されていない。より現実味を出すために年代を加えたのであろう。また、赤松宮が晋代の創建とされていたので、それに合わせたものと思われる。

第二に、皇初平(黄初平)の師が赤松子となっていることである。『神仙伝』の(5)では、皇初平(黄初平)が仙人になった後に赤松子と名乗ったとされ、むしろ皇初平(黄初平)が赤松子であったように述べられている。『赤松山志』のバージョンでは、皇初平(黄初平)が赤松子と名乗ったのは、その道を継承していることを示すことと、正体を隠すことが目的だとされている。赤松子と皇初平(黄初平)を切り分けて、師弟として再設定しているのがポイントである。

ここで述べた皇初平(黄初平)のエピソードにより、金華山洞の一帯は赤松

子と皇初平（黄初平）の聖地としてあつかわれるようになった。金華山洞は皇初平（黄初平）たちが修行した場所とされ、金華山も赤松子にちなんで赤松山とも呼ばれるようになった。また、中心となる道観である赤松宮（宝積観の異称あり）の名も、もちろんそれに由来する。

三、洞天の現況：双龍洞景区

それでは、以下に洞天の現況を述べる。現在、金華山洞一帯は風景区になっており、双龍洞景区と黄大仙景区の二つの風景区に洞窟と道観がある（図1）。調査当日は金華の市街地からタクシーをチャーターして二つの風景区を移動した。まず山上にある黄大仙景区に向かい、そこから双龍洞景区を回った（図2）。さらに、運転手の提案で少し離れた場所にある赤松宮の遺跡にも行くことができた。なお、現在の香港では黄大仙（＝黄初平＝皇初平）信仰が盛んであり、香港からの客がよく訪れるため、その運転手も風景区に行くことが多いとのことであった。以下、双龍洞景区と黄大仙景区、さらに赤松宮の遺跡の三つの区域に分けて現況を述べたい⁷⁾。

金華山洞の中心となるのは、朝真洞・氷壺洞・双龍洞の三つの洞窟である。『赤松山志』の「洞穴類」では、金華山洞（洞元洞天）を概括して、次のように記している。

（洞元洞天）係三十六洞天、亦名金華洞天。與赤松山相接、分上中下三洞。上曰朝真、中曰氷壺、下曰雙龍。竒偉峻拔、巖穴奮踞、風雲凝互、氣勢磅礴、上逼牛千之輝、下接羅浮之脉。（4a）

朝真洞は上洞、氷壺洞は中洞、双龍洞は下洞とされており、これはそのまま三者の位置関係を表している。また、羅浮山に地脈が通じているとあるのが興味深い。さらに、

此洞天元係赤松所轄。據博異志云、皇氏兄弟、得道游止之地。洞天福地志云、郡人皇氏於此學道。凡投告龍簡、必至焉。理廟嘉熙間、祈嗣告盟於此。宮中有御醮青詞碑、可考。（4b）

とあり、赤松子が管轄し、皇初平（黄初平）兄弟が修行した場所であると記されている。また、投龍簡が行われたともあり、道教儀礼の場としても機能していたことがわかる。南宋・理宗の嘉熙年間（1237～1240）にも世継ぎの誕生を祈って儀式が行われ、その儀式の際に使われた青詞を石刻した「御醮青詞

注7…現在の金華山洞についての記述は、金華市双龍風景名勝区管理委員会編『金華山旅遊』（調査当時に入手したパンフレット。出版年は不明）、および現地に建てられていた観光用の碑文や看板を参照している。

注 8…『赤松山志』「碑籍類」にも「御醺碑」とある(18b_o)

碑」も作られ、赤松宮に立てられたという^{*8}。

(一) 朝真洞

まず上洞とされる朝真洞について述べよう。朝真洞は山の上部、海拔 645 メートルのところにある。洞窟の下までは観光用に整備された道路で行けるが、そこからさらに石段を登らないとたどり着けない(図 3)。

洞窟の入り口はホールようになっており、おそらく皇初平(黄初平)と思われる像があった(図 4)(図 5)。洞窟内部に入るための入り口はさらに奥にあり、それほど大きくはないが、その内部には巨大なトンネルのような空間が広がっている。筆者が今まで見てきた洞天の中でも最大級の規模であり、その巨大さに圧倒された。この朝真堂は縦に長い洞窟であり、約 250 メートルにわたる長さがあるという。各地の洞窟と同じように極彩色のライトアップがされており、湿気が多く、筆者の機材では洞窟内部の撮影は困難であった。

(二) 双龍洞と氷壺洞

双龍洞と氷壺洞は内部でつながっており、双龍洞が入口、氷壺洞が出口になるよう整備されている。そこで、この二つの洞窟についてはまとめて述べることにする。

前者の双龍洞は景区の名称になっていることから分かるように、現在でもこの一帯の主要な洞窟とされ、観光の目玉となっている。観光用の掲示板には、洞窟の入り口に二つの大きな鍾乳石があるため、この名称となったと解説があった(ただし、『赤松宮志』には特に説明が無い(図 6))。

双龍洞の入り口は巨大なホールようになっており、まずその大きさに圧倒される(図 7)。奥に進んでいくと、行き詰まりに洞窟の入り口がある。洞窟内部には船に寝転んで入っていくのが双龍洞の特色である。洞窟外部と内部に係員が常駐し、船をケーブルで往復させていた(図 8)(図 9)。これは洞窟の入り口が一段低くなっており、なおかつ地下水の水位がゲート状の入り口の天井近くまで上がっているため、天井の下のわずかなスペースを通らねばならないからである。筆者が船に乗って洞窟に入った際は、自分の顔と天井の距離はわずか数十センチほどであった。

なお、この双龍洞の入り口については、『赤松山志』にも「下洞の門は極めて低く、舟に非ざれば入るべからず。既に入りては燭に非ざれば見るべからず」と記されており、宋代にはすでに現在のような状態になっていたことが確認できる^{*9}。

無事にゲート状の入り口を超え洞窟内部に入ると、やはり巨大な空間が広がっており圧倒される。洞窟全体で 3400 平方メートルとのことであるから、その規模がうかがい知れるであろう。内部に入ると鍾乳洞特有の冷気があり、筆

注 9…原文「下洞門極低、非舟不可入。既入非燭不可見」(4b_o)。なお、方鳳が双龍洞に入った際には船に乗らずに入れたという。

金华山双龙国家级风景名胜区导览图

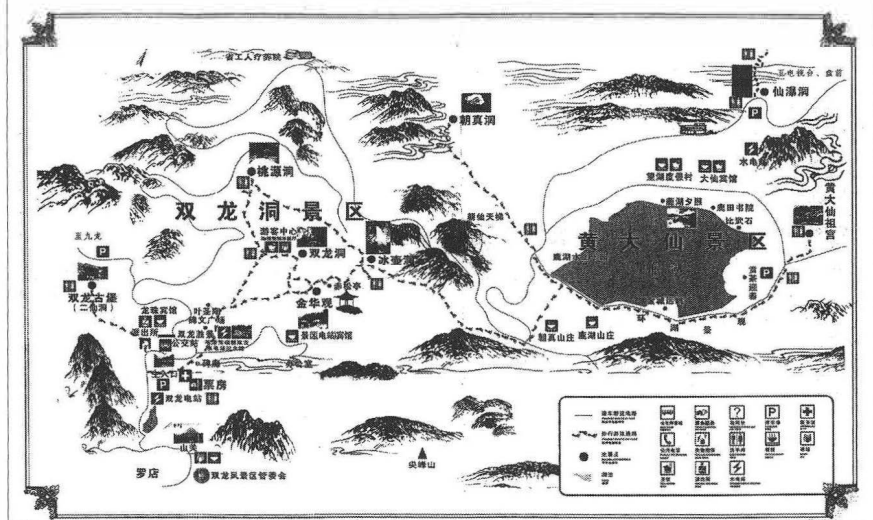


図1 双龍洞景区と黄大仙景区の観光用地図



図2 双龍洞景区の入り口

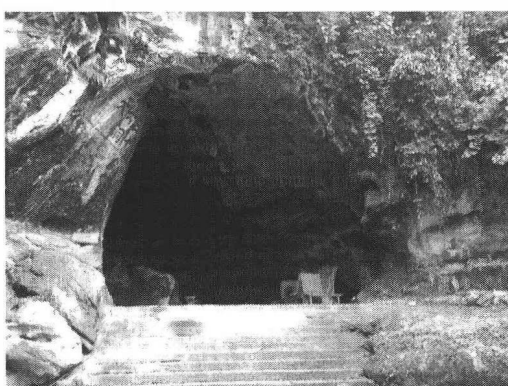


図3 朝真洞の外観

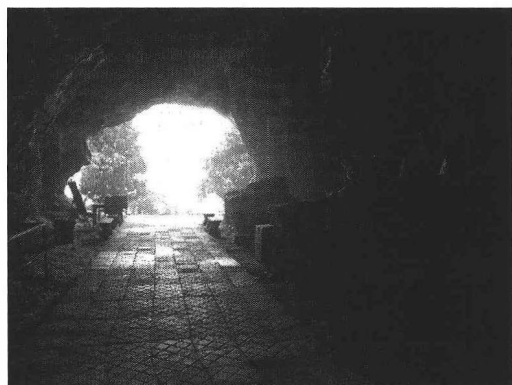


図4 洞窟の入り口（外洞）を内部から撮影

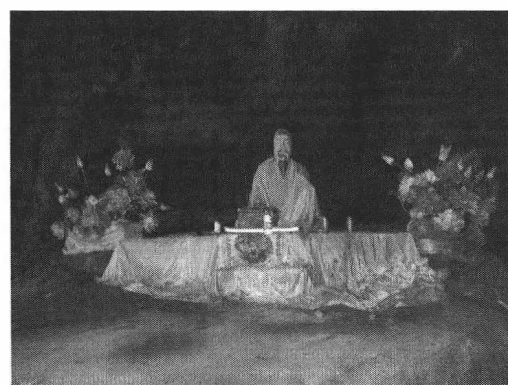


図5 皇初平（黄初平）の石像？

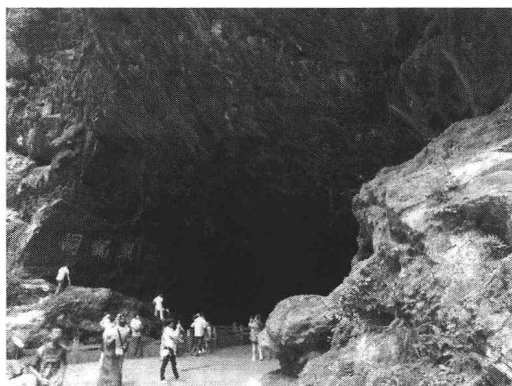


図6 双龍洞の外観

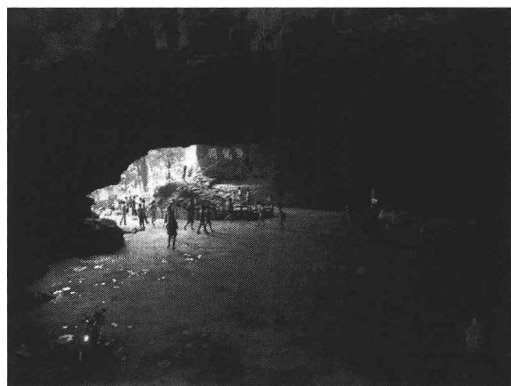


図7 双龍洞の入り口（外洞）を内側から撮影



図8 洞窟内部に入る船と係員



図9 船に乗るために行列する観光客



図10 洞窟内の看板



図11 氷壺洞の出口の階段

者が訪れた9月の時期には納涼場所として最適であった。

また、『赤松山志』には、

下洞有石龍・虎・獅・象・麟・鳳・鐘・鼓之類、難可枚數。又有雪山等處。
鄱陽湯中曾有詩曰、金堂玉室相掩映、珠簾翠箔誰褰開。盖以洞中有動用什
物室宇戶牖故也。(4a～b)

とあり、内部に「龍・虎・獅・象・麟・鳳・鐘・鼓」などの形をした鍾乳石があると記されている。詳細は分からないが、そのような見立てができるような巨大な鍾乳石はいくらでもあった。方鳳の「金華洞天行紀」でも洞窟内部について詳しく述べられており、やはり動物などの形をした奇岩のことを記しており、『赤松宮志』と共通したものも見える。ただ、残念ながら、筆者の持っている情報では現在の状況と対照ができない。

洞窟内部を進んでいくと看板が掲示されており、氷壺洞に近いことを知らせてくれる(図10)。双龍洞との境目付近、氷壺洞の入り口には高さ26メートルほどもある大きな滝がある。『赤松山志』にも、「中洞に水簾の直下する有り、寒玉横に飛び、其の間に石像・石筍など有り」(4b)と記されている^{*10}。氷壺洞はその名の通り、縦方向に細長く壺状の形をしていることから名づけられたという。およそ洞窟の縦方向の長さは120メートルであり、出口に向かって二百六十段あまりの石段を登らねばならない(図11)(図12)。なお、方鳳

注10…原文「中洞有水簾直下、寒玉横飛、其間有石像石筍等。」



図12 氷壺洞の出口の外観



図13 金華観の外観。「赤松下宮」という額がかけられている。

注 11…原文「洞口視深處、乃暗穴但聞潺潺水聲。束數炬相後先若入井然、稍斜向內、衆魚貫而下、石滑且險。約三十丈至水簾、自高巖噴出、下有巨石盛之、即不知水之所往。」

注 12…廣瀬直記氏は2012年に金華山洞を訪れており、その際に双龍洞景区にある桃源洞を実見したとのことである。桃源洞は皇初平（黄初平）が煉丹を行ったとされている場所である。筆者が調査をした際には工事中で見ることができなかった。

注 13…原文「石室洞。在螺獅巖之側、即赤松子引小皇君入山修道之所。上則石室、高探丈餘、方廣相等。洞在其左、自二皇君得道之後、洞門深鎖、人不可到」（5a～b。）

が氷壺洞に入る際は井戸に入るようであったと述べており、現在の出口、つまり本来の入り口から氷壺洞に入って洞中の滝を見たようである^{*11}。

この二つの洞窟は、筆者が見た洞天の遺跡の中でも最大級のものであり、小洞天の末尾を飾るにふさわしいという印象を持った。

（三）金華観

双龍洞の近くに金華観という道観がある（図 13）。『赤松山志』にも、「双龍洞のそばにあり」（10b）とあるので、宋代にまでさかのぼる来歴をもっていることが分かる。また、金華一帯の道教の中心的な拠点であった赤松宮（以下に詳述）の支院として位置づけられていたようであり、同資料でも「赤松の下観」（106）と記されている。

現在の金華観は1934年に再建された後、1990年に規模を拡充したという。その際、石羊が出土したといい、古来から皇初平（黄初平）信仰の聖地であったことがうかがえる。現在の金華観でも黄大仙が祭祀されており、黄大仙の人氣にあやかって、華僑の信者の寄進を目当てに整備された道観のようであった。

（四）二仙洞

洞天を形成する三つの洞窟以外にも、この景区には洞窟がいくつかある^{*12}。そのうち、二仙洞という洞窟を見ることができた。この洞窟の名称はもちろん、皇初平（黄初平）と初起の兄弟にちなんだものである。現在、この二仙洞は「双龍古堡」とも称されている（図 14）（図 15）。

『赤松山志』を見てもこれに該当するような洞窟を見出すことができないが、二皇君の伝記に「今、石室の下に洞有り。蓋し二君深隱の秘宮なり」（2a）という一節がある。この洞窟は「石室洞」を指しているようであり、その石室洞は南宋時代にはすでに閉鎖されていたという^{*13}。もしかすると二仙洞はこの洞窟かもしれないが、現時点では詳細は不明である。

四、黄大仙景区

（一）仙瀑洞

次に黄大仙景区の洞窟と道観について述べる。景区の名前になっていることから分かるように、黄大仙の聖地というのがセールスポイントのようである。この景区は鹿湖の周りを囲むようにあり、そこに仙瀑洞と黄大仙祖宮がある。

仙瀑洞も『赤松山志』に該当する洞窟は見いだせず、由来は不明である（図 16）。その名の通り、内部に巨大な滝があるのが特色である。73メートルの高さを誇るもので、洞窟内部にある滝としてはかなり大きな規模である。洞窟には滝の上方から入り、下に降りていくように整備されていた。入ってすぐに



図 14 二仙洞に至る門

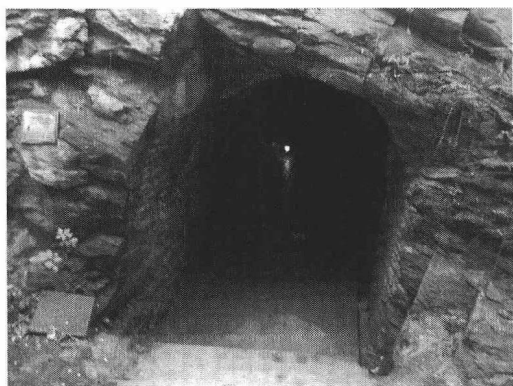


図 15 二仙洞の入口



図 16 仙瀑洞の内部



図 17 滝の上部を裏から撮影。「仙瀑洞」というネオンが設置されており、その下を滝が流れている。

滝の流れ出すところを見ることができる（図 17）。ただ、筆者が調査に行った際はあまりライトアップされておらず、下側の方はよく見えなかった。なお、洞窟の出口は入り口よりもかなり下の方にあり、洞窟から出た後に驚かされた。

（二）黄大仙祖宮

仙瀑洞の近くにある道観であり、皇初平（黄初平）を祭祀するものである（図 18）。香港などにおける黄大仙人気を受けて、1990 年代に作られたという^{*14}。写真を見ると「洞天実習体験キャンプ」という垂れ幕がかかっているのが確認できるが、朝真洞にも同じものがあり、洞窟で修行体験のような催しをしているようである（図 19）。

注 14…張誠道「黄大仙隠居地—赤松山淵源—」（『中国道教』2003 年第 5 期）を参照。

五、赤松宮の遺跡



図 18 黄大仙祖宮の外観



図 19 朝真洞の入り口にかけられた垂れ幕

注 15…「自晋而我朝、香火綿滋」(2b) という記述がある。

注 16…方鳳は当時残っていた「宝積観」の額を見た」と記している。

注 17…以下、宋代における赤松宮の道士の事績については、『赤松山志』『人物類』(13a～16b) にもとづいている。

注 18…高士の制度については、汪聖鐸『宋代政教関係研究』(人民出版社、2010 年) 第十六章「南宋御前宮観の高士」を参照。

注 19…この茅山宗師の篡奪事件については、上述の汪聖鐸『宋代政教関係研究』、丁培仁『元前道派研究』(四川人民出版社、2013 年) などが言及している。なお、筆者はこの事件についての別稿を発表予定である。

以上に述べた二つの景区の東南側に山口馮水庫(ダム)があり、そのほとりに赤松宮の遺跡がある。筆者が調査した際には景区からいったん外に出て、ダムに向かった。周囲では造園業が盛んらしく、多くの植木が立ち並ぶ中を車で通り抜けていくのが印象的であった(図 20)。

(一) 黄大仙宮(赤松宮の遺跡)

赤松宮は金華山(赤松山)に建てられ、金華の道教の中心となる道観であった。『赤松宮志』によれば、皇氏兄弟が赤松子から道を伝授された場所に建てられたという。『赤松宮志』では皇氏兄弟を東晋時代の人としているので、そこまで由来を遡らせているのであろう^{*15}。

ただ、赤松宮がいつごろ、どのように創建されたのかは、資料不足により不明である。ただ、杜光庭が「赤松観」にふれているので、唐末の頃にはよく知られていたのは間違いない。宋代の大中祥符元年(1008)に「宝積観」と賜額されているが、赤松宮とも呼ばれ続けていたようである^{*16}。

赤松宮(宝積観)は宋代にその最盛期を迎える。北宋時代の道士・董惟慈はその名声をもって神宗に召され、賜号された。また、首都開封の中太一宮の住持もつとめ、中央に進出をはたしている。哲宗の元祐年間に赤松山に戻り、赤松宮(宝積観)の住持になったという^{*17}。

南宋時代には、紹興年間に黄彦達が住持をつとめ、再建をはたした。また、盛曠も高宗に召され、賜号されている。周大川は寧宗に召され、高士となった。高士の制度は孝宗の時にできたもので、首都臨安の御前宮観に設置された高士齋(高士堂)に各地の有力な道士を招聘するものであった^{*18}。つまり、周大川は南宋朝廷公認のエリート道士としてあつかわれていたことになる。周大川に続いて、呉養浩も高士となったようであり、当時の道官の最高位である左街道録にも就任している。



図20 山口瀉ダムへの入り口にある牌楼。裏側には「赤松山」と記されていた。



図21 黄大仙宮の外観



図22 元辰殿

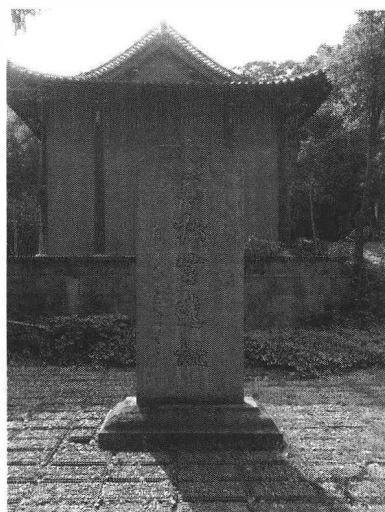


図23 赤松宮の遺跡であることを示す石碑

赤松宮（宝積観）の勢力がピークに達したといえるのが、理宗の時代である。朱知常は茅山の玉晨観の住持となった後、高士となり中央に進出した。モンゴル軍が南宋を攻撃した際、儀礼によって「陰兵」の加護を得たとして理宗の寵を得て、やはり左街道録に就任している。そして特筆すべきは、茅山の第四十一代宗師に就任したことである。上清経籙の伝授を掌る茅山の宗師の地位は、茅山の道士に継承されていた。朱知常はその地位を篡奪するほどの勢力を持っていたのである^{*19}。

以上のように、宋代には赤松宮（宝積観）の道士たちが皇帝と結びつきを得て中央に進出しており、浙江地域でも大きな力を持つ道観であった。『赤松山志』が編纂されたのも朱知常が茅山宗師の地位を得た後であり、最盛期を記念する意味があったと思わ



図24 二仙（皇氏兄弟）の神像

れる。

現在、赤松宮の遺跡の近くには、黄大仙宮が建てられ、道士が活動を行っている。タクシーの運転手によれば、やはり香港からの援助を受けているということであった。規模はそれなりに大きく、道士も常駐しているようであった(図 21)(図 22)。

黄大仙宮は山口瀕水庫のほとりの山の上に建てられている。そのふもとには赤松宮の遺跡であることを示す石碑がひっそりと立てられていた(図 23)。その石碑の前に道観らしき建物があったものの、中身は空っぽであった。その近くには皇氏兄弟を祭祀する廟があったが、山上の黄大仙宮に比べると整備はあまりされていないようであった(図 24)(図 25)。

(二) 臥羊山

臥羊山は皇初平(黄初平)が羊を石にしたとされている山である。山口瀕水庫の周りは山で囲まれているが、黄大仙宮のある山とダムを挟んだ向かい側(東側)にあるのが臥羊山である(図 26)(図 27)。『赤松宮志』にも赤松宮に向かい合っていると記されている(6b)。

時間の関係上、特に山に入って調査することはかなわなかったが、牧羊亭という石造りの亭があった(図 28)。名前から明らかなように皇初平(黄初平)の伝説にちなんだものである。寄進者の名前を刻んだ石碑が立てられており、現在も皇初平(黄初平)に対する信仰が息づいていることを感じさせられた。

六、おわりに

以上、金華山洞の現況を述べてきた。調査は一日だけで行ったものであり、準備も不足しており、まだ不明な点が多く残っている。機会があれば後日あらためて金華山洞を訪れ、今回の調査の補充をしてみたい。また、時間と紙幅の都合上、元初までの資料しか参照できなかった。その後の金華山洞の展開については、これも機会をあらためて検討することにした。

とりわけ現代の金華山洞をとりまく状況はなかなか興味深い。香港における黄大仙信仰が盛んになったことが、金華山洞一帯の整備や観光地化にも大きな影響をあたえており、現代中国の宗教事情を考える上でも考察に値する事例ではないかと思われる。

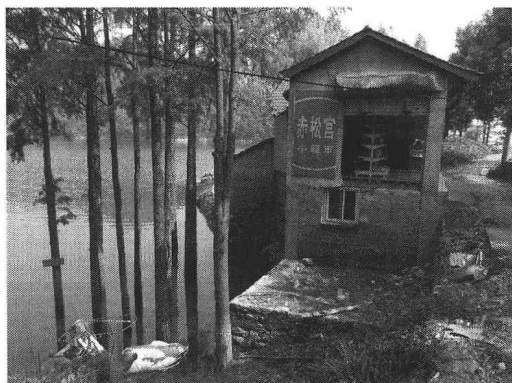


図 25 「赤松宮」の名を冠した売店



図 26 黄大仙宮にある祭壇。ここからダムが一望できる。



図 27 黄大仙宮の祭壇からダムを見下ろした風景。左側の山が臥羊山。



図 28 牧羊亭